日本の伝統的な医療倫理
― 道教思想の影響 ―

Traditional Medical Ethics in Japan
― Influence of Taoism Thought ―

関根　透

Toru SEKINE

「鶴見大学紀要」第48号　第4部

人文・社会・自然科学編　（平成23年 3 月）　別刷

日本の伝統的な医療倫理
― 道教思想の影響 ―

Traditional Medical Ethics in Japan
－ Influence of Taoism Thought －

関　根　　透
Toru SEKINE

はじめに

道教を中心に平安時代に編纂された『医心方』と、儒教を政治の根幹に据えた江戸時代の健康書『養生訓』に焦点を当てて医療倫理について考えてみたいと思う。日本に朝鮮半島を経て仏教が百済の聖明王の使者・怒唎斯到契によって欽明天皇に金銅像の釈迦仏や経論などが献上されたのは、538年である。外来文化として仏教だけが中国から移入されたのではない。仏教伝来以前の513年には、継体天皇に五経博士の段楊爾が会見し、彼が儒教を伝えたとも言われている。一方、道教が公に伝来されたという記事を見ることはできないが、中国や朝鮮半島の人々が盛んに往還しているので、道教が移入されたと考えるべきであろう。従って、古代の日本の医療にもこれらの外来文化が医療観に大きな影響を与えていたと考えられる。

中国の医療倫理には、当然漢民族固有な考えが医療観に介在している。そのため、医療全体が他民族には理解しにくい部分もある。現在でも、漢方の医療観は西欧医学では理解しがたい部分があるという。更に、倫理的な医療観は合理的には説明できない部分が多いので、漢民族固有の考えが反映している道教は他民族にはわかりにくい。しかし、古代日本人は道教の医療倫理をそのまま移入し、日本的な考えに昇華してきた。そうした中国の先進的な医療観が日本の代表的な医書に多数引用されている。その代表的な古代の医書が『医心方』である。

2、道教的な医療倫理の概観

道教とは、中国の原始的な民間信仰から派生した「不老不死」や「不死長生」を目的とする「神仙思想」で、複雑で雑然としている漢民族固有の宗教である。そこには、誰でもが願う現世の幸福観である「健康で長寿の生き方」が求められている。従って、道教では人間は心的な平安や不動の態度を求める「寡欲」、「安寧」、「抑制」などが問われている。それは医療倫理にも深く係る行為でもある。当時の中国人の医療倫理観は、こうした道教思想に基づいた考え方が基本にあるという。その上に、古来の儒教思想の考え方と西域からの仏教思想とが混淆して、漢民族固有の医療倫理観を形成した。現世利益の不老長生を目的とする道教は予防医学を説き、未病を治す医療として当時の人々から歓迎された医療観のひとつであった。

道教の歴史は古く、後漢の順帝の頃に太平道と五斗米道を源流として道教教団が成立したといわれる。後漢末には、道教は仏教や儒教や道家の思想を入れて「延命長寿」を図る道教教理の確立に努めた。道教は老子を神格化し、種々の神儀や神々を持ち、易の原理も入れて「延命論」を展開した。易を用いた魏伯陽、仙術を説いた葛洪が著名な祖師である。彼らは穀物を食べない「辟穀」、仙薬を服用する「服餌」、柔軟体操をする「導引」などの健康法を示した。なお、我々がよく耳にする太極拳は「導引」による「気功」で、それは道教のひとつの健康法である。

さて、道士である葛洪は『抱朴子』の「太上感応編」で民衆道教の源流を示した。そこでは、人間の生き方を述べ、善行を積んで「道」を得た人間を理想人と捉え、その理想人は超人的な能力を持ち、不老不死となって「仙人」とか、「神人」と呼ばれた。仙人は雲に乗って空を飛び、天に昇り、霧や霞を食べて生活し、妖怪や悪鬼を鎮める神通力を持った理想的な健康人を意味している。その道教が宗教として確立されたのは、寇謙之によってである。彼は「新天師道」を唱え、それを太武帝が国家公認の宗教として認めてから広く流布するようになった。

唐の時代になると、道教の『道徳経』が科挙の試験

に出題されたりしたので、更に普及した。玄宗皇帝は道教を信仰し、道士を官吏にも採用し、『道徳経』の保護も行った。更に、宋代にも真宗と徽宗が道教を保護したので、道教が広まった。

また、『神農本草経』に神仙思想を加えて改訂したのが陶弘景で、道教の道士として知られている。日本人には芥川龍之介が著した『杜子春』物語の主人公・杜子春と仙人との物語は道教に関する話として人口に膾炙している。

清の時代には、道教は皇帝の保護もなくなり形骸化した。中華人民共和国になると、道教は迷信と捉えられて衰退し、文化大革命においては道教施設が破壊されたが、現在は過去の文化遺産として保護されているという。

道教は死を超越できない事態と捉えていたが、生を延ばす健康、つまり、日頃の養生に注目した。しかし、「不老不死」を説く、矛盾した医療観も展開した。道士は世俗から離れ、倫理的な行為である善行を積み、長命で、神通力をもち、自然をも支配することを理想とした。道教の神仙家は不老不死の薬を求めて草根や木皮を採取し、陰陽家は易を基にした陰陽説を説いた。「養生」の道は心身の調和に関係し、不老長生を目的としたので、心身の調和融合を重視した。しかし、道教の養生思想は非科学的で、論理的に説明できない神秘的な修業を唱えているために、現代医学では理解されていない部分も多いようである。

日本では、道教の流れとして「陰陽道」や「修験道」が知られている。古代の日本医療にも、道教による医療知識や医療技術や医療倫理が導入されている。しかしながら、日本は「日本の君主、先に道士の法を崇めず」と『唐大和上東征伝』が伝えているように、中国から公に道教の輸入を認めていない。従って、古代の日本の医療では道教の養生を体系的に受容してきたとは思われないが、玄宗皇帝の時代に道教が盛んであったので、遣唐使たちは中国の先進的な文化として道教の思想を学んで帰国したと思われる。従って、道教は日本人の宗教観にも深く関係しているといわれている。しかし、儒教や仏教に比べて日本人は積極的に道教に関心を持って生活の中に取り入れたとは思えないが、無意識のうちに生活に混在して行ったと思われる。天皇は道教の受容を拒否したが、あの空海がもたらした真言密教には道教的な呪符、呪言、呪術、呪法などが多数取り入れられているという。空海は恵果の弟子であり、恵果の師は不空で、不空は道教の呪法を恵果に伝えたといわれるので、恵果が空海に道教を伝えていたとしても不思議ではない。

なお、道教は「不老長寿」を説く宗教であるので、日本の古代医療観にも大きな影響を与え、「耀譲の未病を治す」とか、『淮南子』の「良医は病無き之病を治す」とか、『黄帝内経素問』の「聖人は己に病むを治せずして、いまだ病まざるを治す」などは道教の考え方である。江戸時代の安藤昌益などの医療観にも「未病を治す」などの道教的な考え方を説いている。この江戸時代では、医療と養生とを分けて、医療は病人を治し、養生は病人にならない予防法を説いている。つまり、医療は病気を治す治療技術に対して、養生は予防医学のような日頃の鍛錬による健康法である。

3、平安時代の医療観の概観

平安時代は天皇を頂点とする貴族中心の律令国家であった。初めは外来文化の摂取に努めた「唐風文化」の時代であったが、寛平6年（894）に菅原道真が遣唐使廃止の建白書を提出し、外国からの文化の移入が公には途絶えた。そのために日本人が創作した仮名文字を使った和歌や日記文学などは日本的で「和風文化」の時代を到来させた。更に、末期になると律令制度が形骸化し、末法思想が普及し、社会不安が生じ、浄土思想に関心がもたれるようなった。貴族も混乱した社会の中で自らの極楽往生を願望した。

さて、平安時代前半において中国から帰国した円仁は『入唐求法巡礼行記』で中国では道教が盛んであった様子を伝えていると坂出祥伸氏は『道家・道教の思想とその方術の研究』（p322）で述べている。遣唐使は道教が盛んな長安で中国文化を学んで帰国している。当然、日本に道教的な考え方が紹介されたと思われる。その先進的な中国文化の移入が遣唐使の廃止で途絶えしまったのである。貞観17年（875）には嵯峨天皇が収集していた冷然文庫の書籍が全て灰燼に帰し、朝廷が保存していた医書がなくなってしまった。当時の貴族は不健康な生活をしていたので、彼らにとって医書不足は切実な問題であった。そのために天皇は勅令を発して医書の出版を命じた。例えば、『大同類聚方』、『摂養要方』、『金蘭方』、『医心方』などは天皇の勅令によって編纂された医書である。これらの医書はすべて貴族に独占され、一般庶民がその恩恵に浴することはなかった。貴族は自分たちだけの無病息災と長寿を願ったのである。この無病息災と長寿の医療観は日本人が無意識に受容した道教の神仙思想からも影響されていたと思われる。当時移入された医書には道教的な医療倫理が満載されていた。あの崇仏派の聖徳太子の『十七条憲法』にさえ道教的な思想が混在されていると言われている。従って、平安時代の代表的な医書である『医心方』には、道教に関する中国医書の引用が多く見られる。

4、丹波康頼編纂の『医心方』の医療倫理観

平安時代の代表的な医書は丹波康頼（911－994）が編纂した『医心方』30巻である。それは彼が天元5年（982）4月13日に円融天皇から勅命を受け、永観2年（984）11月28日に円融帝に献上された医書である。献上されると、『医心方』は直ちに秘庫に納められてしまった。安土桃山時代になって正親町天皇は『医心方』を半井瑞策に下賜されたが、江戸時代の後期に復刊されるまで『医心方』の内容をあまり詳しく知ることはできなかった。従って、重要な医学書であったが、次時代の医学の向上には役に立たなかった医書である。

さて、編者の丹波康頼は『尊卑文脈』によると、丹波矢田部郡の人で、丹波宿禰の姓を賜り、「医術は神霊に通じ、褒誉は天下に溢す」といわれ、地位は左衛門佐行鍼博士，従五位上であった。現存しないが、彼は『康頼本草』と『神遺衆古秘方録』を著したといわれる。孫の丹波雅忠は曲薬頭と施薬院使を兼ねた朝廷の最高位の医師になった人物である。彼は『医心方』から抜粋した『医略抄』や『医心方拾遺』を著している。

現在『医心方』は国宝に指定されている唯一の医書で、『医心方』には隋唐医書や仏典など百余書の文献から治療法や養生法などが引用されている。この医書は引用のみで構成され、症例別になっている。引用ばかりの構成のため、模倣医書との批判もあるが、丹波康頼自身の見識や個性が随所に示されている医書でもある。

『医心方』には道教の医療観が散見している。巣元方の『諸病源候論』によって項目が立てられ、王燾の『外台秘要方』を模範にして中心部から周辺部へ、総論から各論へ、上部から下部へと説明されている。その医療は孫思邈の『千金方』、陳延之の『小品方』、葛洪の『抱朴子』などの道教に関係のある医書からも多数引用されている。他に儒教や仏教に関係のある医学書や経典からも引用して紹介されている。まさに『医心方』は当時の中国の道教、儒教、仏教の医療観が混在した医書なのである。

『医心方』の冒頭の第1巻には医療の本質、医師の使命、医の倫理などの医療の根幹が示されている。この第1巻の多くの部分は道教の道士である孫思邈が著した『千金方』（『備急千金方』、『千金翼方』）からの引用が中心になっている。孫思邈とは『千金方』の著者であり、道士である。『千金方』の初めに「重刊孫真人備急千金要方巻之一　論大医習業第一』とあるので、彼の名は道教の名称である「孫真人」と示されている。彼は太白山で道士として修業を積み、道教史上に大きな足跡を遺した人物と言われている。『中国医学古典と日本』（p438）によると、『旧唐書』の方技伝には道士としての彼の人間像が紹介されているという。

『医心方』には、孫思邈が『千金方』で、道士の張湛の言葉を借りて、診断や治療の難しさを述べ、医師は病状の至精至微を知り、浅薄な医学知識や粗雑な医学技術で患者の治療をしてはいけないことを戒めた部分を示している。次いで、丹波康頼は孫自身の言葉で「大医ノ病ヲ治スルニ、必ズ当ニ神ヲ安カニシ、志ヲ定メ、欲スルコト無ク求メルコト無ク、先ズ大慈惻隠之心ヲ発シテ、普ク含霊之疾ヲ救ワンコトヲ誓願セヨ。若シ病厄来タリテ救ヲ求メル者アラバ、其ノ貴賤、貧富、長幼、研醜、怨親、善友、華夷、愚痴ヲ問フヲ得ズ。普ク同一等、皆至親之想ノ如クセヨ」を『千金方』から紹介している。更に『医心方』は「又（千金方）云フ、医為ル之法、多語、調笑、談虐謔、喧嘩シ、是非道説シ、人物ヲ議論シ、声明ヲ衒耀（自慢）シ、諸医ヲ貲毀（誹謗）シ、自ラ己ノ徳ニ誇衿スルコトヲ得ザレ。・・・此医人ノ膏肓（不治の病）ナリ」を『千金方』の「論大医精誠第二」から引用している。そこには医師の医療倫理が示されている。

また、『医心方』では儒教的な言葉で医の倫理観も紹介している。「医人トハ、己ノ長ズル所ヲ恃ミ、専心財物ヲ経略スルヲ得ザレ。タダ苦ヲ救フノ心作セ。冥道中ニ於テ、自ラ多福ヲ感ゼン。彼ノ富豪ニ処スルニ珍貴ノ薬ヲ以テシ、彼ヲシテ弁ジ難カラシメ、自ラ効能ヲ衒フヲ、得ザレ。諒ニ忠恕ノ道ニ非ザルナリ」と医療倫理とは『論語』が示す忠恕の道であることを説いている。

仏教経典からの引用もある。「先ズ慈愍ノ心ヲ起シ、財利ヲ規ルコト莫レ。我既ニ汝ノ為ニ療疾中ノ要事ヲ説ク。此ヲ以テ衆生ヲ救ヒ、当ニ無辺ノ果ヲ穫ベシ」。これは『金光明最勝王経』からの引用である。

丹波康頼は『医心方』の第1巻では、ほとんど『千金方』からの引用で占めていたが、他に「養生とは、まだ病とは言えない内に病を治めるのが目的である」という道教の考えも道家の著述『文子』から引用している。そこでは「精神を養うのが最上であり、身体を養うのはその次である。精神が清らかで、すべての骨節が安らかであるのが、養生の根本である」ことを示している。このように丹波康頼は道教の現世利益の養生術を盛んに引用し、華陀や葛洪らの養生説も紹介している。康頼は医療の理想は養生術にあるとも考えたのだろう。そこでは、道教的な考えである神仙家の術を紹介し、『荘子』の刻意篇にある呼吸法、導引（健康体操）や、葛洪の『抱朴子』や陶弘景の『本草経集注』に述べられている養生術も見られる。こうして丹波康頼は医療には道教的な養生術が重要であると考えて取り入れたのであろう。

以上のことから『医心方』の医療観には道教の考え

が深く関係し、気功、導引、避穀、存思などが示され、丹波康頼は神仙家の行う不老長寿を医療の理想と捉えていたと考えられる。その理由は『千金要方』の道教に関する部分の第27巻からの引用が多いからである。このように道教的な養生術が多数『医心方』には引用されているが、丹波康頼は道教の思想として引用したのではなく、中国から伝来された先進的な医療として捉えていたと思われる。

5、江戸時代の儒教と道教の医療倫理観

健康で長寿を願う思想はいつの時代にもある。江戸時代は泰平になると多く人々が長寿を求めた。しかし、この時代は、儒教的な考えが政治を支配していた時代なので、武士から庶民にいたるまで儒教的な倫理が求められた。特に心の持ち方として儒教は「仁」を説き、それは神仙思想にも似た長寿を願う慎みのある心と同じようである。

さて、江戸時代は儒教の先覚者であった藤原惺窩が古代中国の道として「尭舜の理想」を徳川家康に説いて、儒教政策を勧めた。また、『武家諸法度』を起草した金地院崇伝も儒教の流れを汲んだ僧侶である。徳川家康は支配体制の根拠に儒教を据え、幕藩体制の精神的な支柱にした。儒教倫理は幕藩体制の封建支配の理論的根拠であり、それを指導したのが林家である。こうした儒教倫理を政治の指針にしていたが、医療倫理は儒教だけでなく、道教的な思想も垣間見られる。仏教的な医療は安土桃山時代の曲直瀬道三によって臨機応変の医学に変わり、江戸時代においては儒教的な医療倫理に関心がもたれた。道教的な医療観や倫理観も一般民衆には同居していたとも考えられる。儒者である貝原益軒が著した『養生訓』には儒教的な医療倫理のほかに、その基になった『頤生輯要』には道教関係の医書からの引用も多く見られる。

6、貝原益軒著の『養生訓』に見られる医療倫理

貝原益軒は、侍医・寛斎の子として黒田藩に仕えたが、黒田藩主忠之の逆鱗に触れ、17年間浪人時代を過ごし、その後、再び出仕するようになった。従って、彼の人生観はその前後で大きく異なる。彼の名は「篤信」といい、字は「子誠」といった。彼は医学、薬学にも詳しく『本草綱目』を校訂し、和名の薬名を付して博物学の書『大和本草』16巻を著した。儒学にも詳しく、彼は幅広い知識と学識を以て藩に仕え、子弟の教育もした。彼は『大和俗訓』、『童子訓』、『益軒十訓』などを著している。また、東軒夫人も賢明な女性で、実は『女大学』は彼女の著作とも言われている。

貝原益軒が著した有名な『養生訓』は、浪人時代にまとめた『頤生輯要』が基になっている。『益軒先生年譜』（『益軒全集巻之一』p23）の「天和二年五十三歳」の記事には「秋七月藍島に於いて朝鮮の来信使を迎え、一行中の学士三人と相会して筆談し、且つ詩を唱和す。姪好古及び竹田直之に従ふ。・・・是より鶴山と交わること最も密なり。此歳頤生輯要成る」とあるように、『養生訓』の基になった書物を上梓している。この『頤生輯要』は益軒が古来の中国医書等を基に養生や疾病や長寿に関する格言や箴言を集めた書で、道教に関係する医書からの引用も多い。なお、この本は門人の竹田定直が編纂したとある。『養生論叙』には、古来より中国の君子は日頃より生命を大切にし、長寿に心掛け、病気にならないように慎みのある生活に努めていた、とある。著者の貝原益軒も慾を慎み節度ある生活を心掛けていた。その考えは道教が説く「不老長生」にも似ている。益軒自身が生来丈夫でなかったので、日頃から健康に留意し、養生に関する言葉を長年に亘って集めていた。資料が沢山集まったので、「頤生之道」を門人の竹田定直に編集させたのである。その『頤生輯要』には、『論語』、『千金方』、『抱朴子』、『孫真人衛生歌』、『准南子』など多数の中国書から引用されている。また孔子、朱丹渓、李東垣、老子、荘子、王陽明、司馬遷などの箴言が示され、道教に関する書物からの引用も多い。

さて、『頤生輯要』の巻之一では「総論」（p755－769）の冒頭に、孔子が曾子に謂った言葉や有名な「身体髪膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始めなり」（p769－774）が引用されている。巻之二は「節飲食」（p774－788）、「戒色欲」（p788－800）、巻之三は「慎起居」（p801－808）、「四時調摂総論」（p808－816）、巻之四は「導引調気」（p816－821）、「用薬」（p822－828）、「灸法」（p828－835）、巻之五は「養老」（p835－844）、「慈幼」（p844－854）、「楽志」（p854－858）。最後に「養生論巻之五後」（p858－860）で、自らの頤生の根本を示し、「保養之道」として門人たちに与えたとある。門人の竹田直之（定直）は貝原益軒を「仁の志のある人物」と讃えている。この養生書は中国書籍から引用構成されているために、全てが漢文で示されている。この『頤生輯要』を基にして、貝原益軒は84歳の折に京都堀河で上梓したのが『養生訓』である。彼は『養生訓』の「後記」には「愚生、昔、わかくして書をよみし時、群書の内、養生の術を説ける古語をあつめて、門客にさずけ、其の門類をわかたしむ。名ずけて頤生輯要と云ふ。養生に志あらん人は、考え見給ふべし。ここにしるせしは、其の要をとれるなり」と結んでいるように、益軒は中国の先人の叡智と自分の体験とを交えて実践的な養生論を説いたのである。

さて、『養生訓』（8巻4分冊）は、正徳3年（1713）正月に出版された書籍で、彼が84歳の時に、慎みのある

生活を基礎として身体と精神の健康（養生）法を考えて示したものである。彼は人間の環境と健康の関係にも注目し、社会的な健康を「人間の真の生き方」として説いている。そこには、彼の長い生活体験と医学観や儒学の深い知識を基に示された『養生訓』は、一般大衆に向けに示した生活心得の啓蒙書である。彼は「精神的な平静心と絶え間ない運動」を古典から探し出し、それを健康法のひとつとして説いたのである。更に前向きに、慎みをもち、心を平静に保つ養生の道を儒教的な倫理として示した。杉靖三郎氏は『養生訓』を現代的に言うならば、「健康医学であり、養生の倫理学」の医学書であると述べている。

さて、『養生訓』の第7巻の「用薬編」の「医を択ぶ」では、儒教思想に基づいた有名な医療倫理の仁術論が展開されている。「医は仁術なり。仁愛の心を本とし、人を救ふを以て志とすべし。わが身の利養を専らに志すべからず。天地の生みそだて給へる人を救ひたすけ、万民の生死をつかさどる術なれば、医を民の司命と言い、極めて大事の職分なり。他術は拙しと言えども、人の命に害なし。医術の良拙は人の命の生死にかかれり。人を助くる術を以て人をそこなふべからず」と医療における仁術について述べている。

なお、同じ「用薬編」の冒頭では、薬は使い方によって毒にもなるので、適切に的を得て使うような善い医師の薬を服用しなさいと述べ、『千金方』の「事無き時は薬を服すべからず」も紹介している。つまり、上中下の医師がいるけれど、上の立派な医師のみが処方した薬が有効な薬であると教えている。また、葛洪の『抱朴子』の「内篇」20巻と「外篇」50巻には、神仙術の不老長生の考えが示されている。道教の丘処機の言葉を介して次のように述べている。「衛生の道ありて長生の薬なし、といへるは、養生の道はあれども生まれ付かざるいのちを、長くする薬なし。養生は、只、生まれ付きたる天年をたもつ道なり。古の人も、術者にたぶらかされ、長生の薬とて用ひし人、多かりしかど、其しるしなく、かへって、薬毒にそこなはれし人あり。是長生の薬なき也」。貝原益軒は道教的な不老長生の薬は存在しないと説いている。益軒は、そこで「丘処機の説は、千古の迷いをやぶれり。此説信ずべし。凡そうたがふべきをうたがひ、信ずべきを信ずるは、迷をとく道なり」と結んでいる。

また、『養生訓』の第8巻「養老編」には、老人が心静かに慎みを以て過ごす道を説き、人間の完成について示しているが、そこには神仙思想を想起させるような道教的な記述は『養生訓』には見出せない。このように『養生訓』には、儒教的考えを中心に貝原益軒自身の体験や経験を基にして自分の信じる実践的な生き方を説いている。しかし、『養生訓』の基になった『頤生輯要』には道教に関係した書物からの引用が多くあったが、貝原益軒は現実的な生き方と当時の社会的背景と自分の考えを交えて著したために、道教的な記載は少なくなってしまったのであろうか。

おわりに

日本は古代から外来文化の影響を受けて発展してきたが、最近は主にアメリカの自然科学技術を採用して豊かで繁栄した国家を建設した。医療においても患者の人権や権利を尊重するアメリカの医療観が導入された。昭和の時代までは、医師は患者の心を忘れ、疾病の快癒にのみ専念し、「病人を診ずして、病気を診る」との批判もあった。今や日本人の延命率は向上し、道教が説く「不老長生」が実現されたかに見えるが、長寿が老人問題を生じさせている。かつて道教の説く「不老長寿」は日本における人生の目標であった。今後はより長い人生よりも生きがいのある幸福な老後を実現するために、我々は先人の叡智を研究して、質の高い生き方の実現に寄与することが求められている。

ここに道教に関する拙文を上梓するに当たって、多くの入門的な道教に関する書籍を利用して、自分のものに努力したことを書き添えておきたい。なお、この拙文は明年度丸善から出版される『東洋の伝統的医療倫理』の素案でもある。